

# 北方内湾における二枚貝の生産力に関する研究

## (要 約)

平野 忠・對馬 廉介・榊 昌文・兜森 良則  
中谷 肇・青山 禎夫

本研究は、水産庁の地域重要新技術開発促進事業により行われたものであり、昭和59～60年度の指定調査研究事業である「二枚貝養殖漁場における適正収容力に関する研究」に引き続き、陸奥湾におけるホタテガイの収容力についての3年間の研究のとりまとめとするものである。前報（青森県1986）では、ホタテガイの摂食可能な餌料量からみた適正収容力（増養殖個体数）を、垂下養殖貝32,300万個、地まき貝26,800万個、計59,100万個と試算したが、今年度はさらに調査内容を深めることにより湾内の地先（各漁協・支所）ごとの生産力（収容力）を算定し、地先の許容量を決める際の基礎資料とすることができた。詳細については、昭和61年度地域重要新技術開発促進事業「北方内湾における二枚貝の生産力に関する研究」（昭和62年3月 青森県）として報告した。

### 研究の方法

本年度は、陸奥湾における餌量の現存量調査と、標準成長を求めるための養殖実証試験を昨年度に継続して行ったほか、5月・10月の垂下養殖実態調査及び9～10月の地まき実態調査の結果から、今年度のホタテガイの成長状況を以前と比較した。次に、最近のホタテガイの現存量を求めるために、従来からの聞き取りによる養殖数量調査にかわり、出荷量からさかのぼる方法を取り、より実態に近い値を得た。それにより軟体部の純生産量を季節別に算出し、またホタテガイによる総摂餌量が分った。この総餌料がホタテガイが利用できる最大値であるとして、標準成長と理想的増養殖形態とによるホタテガイの生産力を地先別に算出することを試みた。

### 結 果

- 最近のホタテガイの成長低下現象は、湾全体のホタテガイの数量が適正数を越えたために、引き起こされたと推察された。
- 現状の漁協・支所別の垂下・地まきの水揚数と生残率から逆算して、0年貝10月時点での全湾の種苗数は9億7,500万個であった。
- ホタテガイによる年間の総摂餌量（湿重量）は、垂下貝7万トン、地まき貝3万5千トンであり、単位面積当りでは西湾側が高く、東湾側で低い傾向がみられた。
- ホタテガイの地先別生産力を合計すると、全湾で垂下貝4億1千万個、地まき貝2億6千万個、計6億7千万個となった（0年貝10月時点）。
- 生産力の値が前報より増えたのは、現存量を水揚数量をもとにした計算により求めて実態に近くなったことと、前報では除外していたいわゆる半成貝として出荷された小型貝も現存量に含めたことにより、ホタテガイの総摂餌量の値が増えたことによるものであった。